

VUCA ワールドと外国語教育*

CEGLOC外国語教育部門長 臼 山 利 信

現在は VUCA の時代だと言う。財界用語で、Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字から成る造語である。これは、予測不能な現代社会の特徴を一言で表す、象徴的な言葉だ。今世界が時代の転換期を迎えているという人々が持つある種の実感から、この造語が時代の雰囲気を取り切った表現として説得力を持つのかもしれない。

VUCA の時代であっても、生活・社会・経済に関わる統計データといった計測可能な指標などから、時代と社会の中期的な見通しをある程度予測することは可能である。21 世紀は、第 4 次産業革命の時代だと定義される。第 1 次 (18 世紀後半) は蒸気機関、第 2 次 (19 世紀後半) は電力・モーター、第 3 次 (20 世紀後半) はコンピュータの登場によって、人間社会の産業構造のあり方が根本的に変化した。第 4 次 (21 世紀前半) ではインターネットと AI の技術の進化によって世界の社会構造がさらに大きく変わることが予測されている。これまでは国家機構や情報伝達手段の制約などにより個人と個人、個人と組織、組織と組織が直接的かつ瞬時に結びつくことが困難だった (関係の閉鎖性)。だが、国家機構などの組織を超え、インターネット技術の実現によってリアルタイムで世界中の個人と個人、個人と組織、組織と組織が容易にかつ直につながることができるようになった (関係の開放性)。一定の「閉鎖性」によって成立していた世界から、ある種垣根の存在しない「開放性」によって成立する世界に変わろうとしているのだ。この開放的なつながりを有機的に発展させ昇華させるための高度なテクノロジー (IoT、AI、ロボット) が半ばセットで登場したことを契機として、日本でも世界でも社会の産業構造の再編が加速している。常識を超えた、全く新しい発想による組み合わせの協働関係が次々と生まれている (例えば、Skype を生んだ国エストニアでは行政サービスの 99% が電子化されている。デジタル技術と行政サービスの組み合わせが実現し、世界初の電子政府が誕生した)。その結果、再編過程において、既存の仕事の種類と内容が大きく入れ替わっていくことになる。21 世紀というのは、これから社会からなくなっていく仕事と、新しく社会に生まれる仕事の双方が共存し、それらがダイナミックに入れ替わっていく時代なのだ。あらゆる分野において社会構造の変化に対応できるイノベーターが求められている時代だと言える。

そのように考えると、大学の外国語教育においても、社会イノベーターの育成に寄与するという視点がすでに必要なのかもしれない。カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授は、グローバル人材育成をテーマとする公開講演会 (2020 年 2 月 7 日) の中で、①「多くの日本の大学関係者は、第 3 次産業革命に対応した思考パターンに留まっている可能性があり、大学の教育が第 4 次産業革命にまだ

しっかり対応していないのではないか」、②「VUCA 時代だからこそ、独立心や創造意欲、柔軟性とリスクに挑む姿勢を持ったアントレプレナーシップ（起業家精神）を大学教育に入れる必要があるのではないか」、③「大卒の経歴だけでは社会の変化とニーズに十分対応できない時代に突入しており、創造性と柔軟性を発揮しながら、新しい問題には新しい方法で解決していくことが求められ、大学卒業後も新しい事態に対応するために生涯にわたって新しいことを学び続ける必要がある（再教育 Reskilling）」と指摘された。當作教授は、外国語教育を含む教育活動を教員主導（座学）から学生主導（グループ作業によるアクティブラーニング）に徹底的に転換し、アントレプレナーシップ教育を強化・普及させ、リカレント教育（生涯学習、再教育）の重要性を現役学生と国民の双方に深くかつ広く理解させることが、第4次産業革命の時代の大学教育に必要不可欠だと説いている。ここでのアントレプレナーシップ教育とは、起業家の育成を目的とするのではなく、起業家精神（自ら考え、評価・判断し、自らのビジョンの下で、リスクを引き受けて、挑戦し行動する姿勢）を教育の中に一部取り込むことを意味している。

事実、今は急速に進む社会変化によって、かつてないほどのスピードで知識と技能の陳腐化が進む時代である。翻って外国語教育の現場においても外国語の教材や方法論の「賞味期限」が年々短くなってきている感がある。第4次産業革命に対応した大学の外国語教育とは何かという問題は、早急に考えなければならない非常に大きな課題である。リカレント教育としての外国語教育も重要な問題だ。本学では科目等履修生の制度がリカレント教育の機能を担っていると考えられるが、創意工夫の余地はまだ十分に残されていると思う。

VUCA の世界は、多言語・多文化な世界である。インターネット技術を通じて、日本以外の世界中の個人や組織に直につながり、やりとりできる手段が他ならぬ外国語である。英語であれ、初修外国語であれ、当該言語の運用能力は、その外国語でしか得られない情報を共有・活用し、実際にプロジェクトなどで協働するための不可欠な前提条件である。その意味で、大学で外国語の運用能力を身につけることは、最新の専門的知識や ICT リテラシー、統計学に基づく一定のデータ処理能力などとともに、（多様性が本質的に内在する）VUCA ワールドを乗り越えていくための一助となることは疑いないと改めて感じる。

* 本エッセイは、2020 年 2 月 7 日に筑波大学筑波キャンパス（中央図書館集会室）で、カリフォルニア大学サンディエゴ校の當作靖彦教授（日本語教育）が「Industry 4.0, University 4.0, Faculty 4.0, Students 4.0 ～第4次産業革命で激変する社会のリーダーをつくる大学教育～」という題目の公開講演会（第8回「中央ユーラシアと日本の未来」、筑波大学「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」主催）で話された内容に、筆者が触発され、問題意識として浮かび上がった論点を整理したものである。